



皮膚科学講座

臨床から湧き出た疑問を研究テーマに



主任教授 山本 俊幸

本学皮膚科学講座は、地域医療を担う良質の皮膚科医を育成することが最大の目標で、そのためにはまず臨床ができることが要求されます。教室が手掛けている研究の内容は、できるだけ臨床に沿ったもので、日常診療から湧き出てきた疑問を解決すべく研究に繋がればよいと考えています。

現在手掛けている研究について紹介します。私のライフワークの一つは全身性強皮症という疾患の病態解析ですが、誰でも誘導可能な再現性の高いモデルマウスを以前作成しました。現在これが強皮症モデルマウスとして世界中で広く用いられています。(図1)世界との競争になりますが、皮膚硬化メカニズムの解析と、新規治療薬の開発に向けての研究を進めています。具体的には、線維化におけるエフェクター細胞や新しいサイトカインの関与、線維化と肥満細胞、オートファジーの役割などの側面から皮膚線維化の分子機構を解析しています。また創傷治癒に関して、創傷治癒遅延モデルマウスを作成しました。(図2)現在これを用いて創傷の治癒機構の病態や治療薬の効果について検討しています。

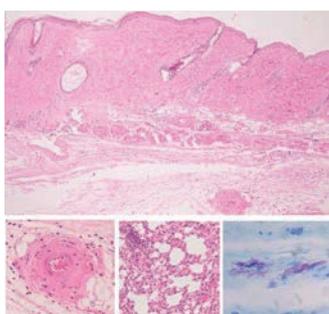


図1 強皮症モデルマウスの病理組織学的所見

乾癬・掌蹠膿疱症に関しては、とくに関節症性乾癬や膿疱性乾癬の病態解析に取り組んでいます。また、掌蹠膿疱症性骨関節炎に関しても、その位置づけやSAPHO症候群との相違についての考え方を発表しました。乾癬に限らず、Th17/IL23 axisが関与する疾患の皮膚症状のメカニズムにも興味を持っており、炎症性腸疾患や関節リウマチに特異的な皮膚症状の病態、さらに成人スティル病や皮膚筋炎の皮膚病変形成のメカニズムについても臨床研究を進めています。

ベーチェット病やサルコイドーシスは東北に多く、当科ではこれまで経験した60例以上のサルコイドーシ

スを元に、本邦人における皮膚サルコイドの特徴を検討中です。ベーチェット病に関しては、教室に保存してある豊富な血清を用いての、新しいマーカーの検索や、結節性紅斑の病理学的な検討を継続しています。

多くの地方大学と同様、当施設に集まってくる悪性腫瘍患者は多く、有棘細胞がんやメラノーマ、外陰部Paget病、血管肉腫も数多く経験します。悪性リンパ腫も専門にしているものがあり、かなりの症例数を集めて解析しています。他にも、アレルギー疾患(食物アレルギーやoral allergy syndrome等)も多く集まっており、現在接触過敏症を抑制する物質について、マウスモデルを用いて検討しています。

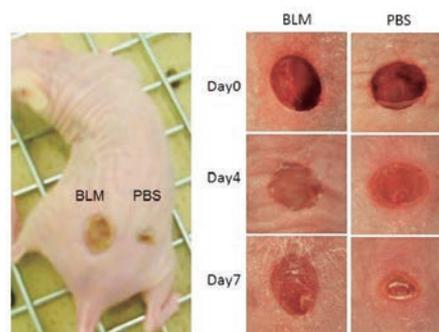


図2 創傷治癒遅延マウスモデル

このように、当講座では研究テーマを絞らずに、各々の教室員が興味あるテーマを自由に選び、臨床と研究とをあまり分けずに、入りやすいところから始められるようにしています。他にも幾つかの皮膚疾患について疾患モデルマウスを作成したいと考えています。皮膚科に興味のある若い人たち、私たちと一緒にぜひ研究を推進しましょう。



図3 皮膚病理モーニングカンファランス